

可觀小説卷廿八

一、享保壬子の蝗害

享保十七年壬子秋七月、西國・中國・四國等蝗災太甚事。七月八日迄は何の事も無之處、九日より蝗蟲湧出候様に出生。虚空迄も黒く成候程に飛廻候。此蟲蟻蛾とも、又は負蟻とも申候由。田一反に鯨の油四合充漉入候へば、蟲は悉く致散落候。其上に水を堰入候て、水落の所に布囊を當置候へば、一反の田に蟲平均三斗餘宛取集て捨申候。其跡一夜の内に稻は枯了候故、皆不農に成候。其國々如左。則江戶表御届有之面々。

- 伊豫松山十五萬石 伊豫宇和島十萬石 伊豫三十五萬石 松平筑後守
- 松平隠岐守 伊達遠江守 筑後久留米二十萬石 有馬中務大輔
- 伊達若狹守 立花飛騨守 肥前島原七萬石 肥前島原七萬石 松平主殿頭
- 伊豫大洲五萬石皆無 肥前唐津七萬石 松平小松一萬石 一柳兵部少輔
- 加藤遠江守 土井大炊頭 肥前平戶六萬三千石 肥前中津三萬七千石
- 大村河内守 松浦肥前守 日向佐原二萬七千石 日向佐原二萬七千石 日向佐原二萬七千石
- 日向佐原二萬七千石 日向佐原二萬七千石 日向佐原二萬七千石 日向佐原二萬七千石
- 日向佐原二萬七千石 日向佐原二萬七千石 日向佐原二萬七千石 日向佐原二萬七千石

- 日向佐原二萬七千石 日向佐原二萬七千石 日向佐原二萬七千石 日向佐原二萬七千石
- 日向佐原二萬七千石 日向佐原二萬七千石 日向佐原二萬七千石 日向佐原二萬七千石
- 日向佐原二萬七千石 日向佐原二萬七千石 日向佐原二萬七千石 日向佐原二萬七千石
- 日向佐原二萬七千石 日向佐原二萬七千石 日向佐原二萬七千石 日向佐原二萬七千石
- 日向佐原二萬七千石 日向佐原二萬七千石 日向佐原二萬七千石 日向佐原二萬七千石
- 日向佐原二萬七千石 日向佐原二萬七千石 日向佐原二萬七千石 日向佐原二萬七千石
- 日向佐原二萬七千石 日向佐原二萬七千石 日向佐原二萬七千石 日向佐原二萬七千石
- 日向佐原二萬七千石 日向佐原二萬七千石 日向佐原二萬七千石 日向佐原二萬七千石
- 日向佐原二萬七千石 日向佐原二萬七千石 日向佐原二萬七千石 日向佐原二萬七千石
- 日向佐原二萬七千石 日向佐原二萬七千石 日向佐原二萬七千石 日向佐原二萬七千石

- 久世隠岐守 伊豫西條三萬石 松平左京大夫 九鬼丹後守
- 吉川左京 肥後小倉十五萬石内 豐前小倉十五萬石内 相良遠江守 小笠原遠江守
- 長門府五萬石内 皆無の旨 出雲松江十八萬石内 毛利主水正 松平幸千代

一、室鳩巢の近作

張良畫贊
五世相韓。義不獨存。博浪一椎。祖龍魄魂。異人授書。藏跡歛光。守柔守弱。天下莫強。出拯兵難。寧爲身謀。籌策視運。蹶項興劉。蟬蛻人世。赤松與遊。邈矣高風。于嗟留侯。

贊鍾馗畫
正氣之聚。賦形純陽。草有指佞。獸有神羊。英鋒所抵。陰邪莫當。矧茲靈質。凝爲剛腸。驅鬼誅姦。妖厲忽喪。偉矣宵貌。威稜孔揚。冀護君子。呵禁不祥。

先生御近作之由にて忠三郎殿より來る。
一、駿臺雜話の儀小寺邊路來狀
一昨二十一日御使罷出候序に、駿河臺へ參候仕候。先生御容躰何の御替被成候儀も無之、御痛は頃日愈御不出來の由

被仰聞候へども、御精神等は去年七月得尊意候節と、何の御替の儀も不被爲見、隨分御爽快にて頃日も講書被遊候由。中村支春老薬も折節被召上、御元氣御養被成、御痛の儀は度外に被成置候旨に候。假名書のもの爲御見被遊、一兩段御自身御讀被遊候て、私へ爲御聞被成候。仁義禮智信の五集に被分候て、五冊御稿本出來有之候。進奏の御本、私書寫の儀御斷申上候處、御聞届に候。兎角先一本出來候へば能候と思召、遅分は不苦候に付、そろ／＼御調被成候由にて、夫をも爲御見候。楷正なる御調様、是程に相調候もの無之候て御氣に入不申候。手跡宜敷は有之候得共、正敷相調候もの無之、假名を書付不申候故、思召候様成もの無之旨被仰候。禮集一冊借用仕罷越、一遍讀過仕候。面白ものに御座候。此集には節義武邊の事など御記被成候。兎角先生御學問の筋、此書にて盡候旨被仰候。精粗巨細、不殘舉り候と申ものに奉存候由申上候へば、成程其通と被仰候。其内貴丈など御疑惑の品ども、慥に可有之と相見候所も御座候。何にしても早速懸御目度候。進奏相濟不申上は、其表へも被遣候間敷御様子に候。右御本御調被遊候事、あ